

“英会話力” ～日本人医師が世界で活躍するために～



NPO法人全世界空手道連盟(新極真会)
総本部師範代(事務局長)五段 東京ベイ港支部・支部長

小井 泰三先生

帝京大学
医学部内科学講座 腫瘍内科

関 順彦 先生(司会)

慶応義塾大学
講師

日向 清人 先生

関：現在、日本に住む外国人は約2%ですが、観光などの目的で出入国する外国人数は、10年前から1000万人以上にまで増加しています¹⁾。2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、外国人数はさらに増える事が予想されます。患者が日本語を話す人ばかりとは限りませんし、通訳の確保が難しい場合も多々あります。そんな中、医師が英語とどのように向き合うかは、今後ますます重要な課題になるでしょう。そもそも、日本の医師は英語論文に触れる機会が多いので英語の「読み・書き」は比較的得意ですが、やはり「話す・聞く」は苦手な方も多いのではないのでしょうか。国際学会などで、「日本語であればもっと質問できたのに」と思うこともあるでしょう。今回の座談会では、英会話上達の習得法や、世界で活躍するための英語力の磨き方について普段英語を使ってお仕事をされている先生方に伺います。

「話すのは度胸、聞くのはセンス」 英会話上達の方法

関：私が10年前に米国臨床腫瘍学会で口頭発表をした際、発表自体はなんとかできたものの、質疑応答になると、相手の質問をうまく聞き取れなかったという苦い経験があります。もともと自分が一生懸命準備

して行っ発表では、発音や抑揚のうまさは別として、伝えたいことは言えるものです。しかし、質疑応答では、そうはいきません。結局、座長の先生に、「ちょっとご質問されている意味がよく分からないのですが、端的にいうと、どういうことをおっしゃっているのでしょうか」とお訪ねし、イエスカノーかで答えられるような質問に翻訳してもらって、その場を収束させました。

Reference

1) 平成27年総務省統計局、平成27年6月法務省在留外国人統計より計算